

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
〒136-0081 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

小塚博さんの願いは通った：

大石 又七

厚生省の社会保険審査会が、このほど小塚さんの病気を、第五福竜丸に乗船していた当時の、ビキニ被曝に関連があると、四十六年間をさかのぼって船員保険の再適用を認めた。

この申請承認に対し、私はもう手を上げて喜べない。なぜなら、行政は当然なことを無視し続けてきたから。その間に何人の乗組員が死んだか。半数に近い十一人だ。この人たちが、最低でも、船員保険の助けが欲しかったのだ。遅すぎる。

これまで私は、自分のことも含め、あらゆる所で乗組員たちの発病を訴え続けてきた。然るに、立場によって人とは非情なものだ。先頭に立って考え協力しなければならぬ立場のものほど「被曝とは関係ない」と反対し妨害しつづけた。これはどういうことなのだろうか。仲間の死の実態を書くことにも「プライバシーの侵害、プライバシー プライバシー」と非難を繰り返した。

小塚さんも、ここに至るまでの道のりは、言葉にならないほどの苦悩の連続だった。乗組員の中からも反対され、身内兄弟からも反対され、静岡県船員保険課からも申請を却下され、そして納得できない思いを、県の社会保険審査会に申し立てたが却下された。

小塚さんと私は、第五福竜丸に乗船当時から今日まで、ある意味では兄弟以上の付き合いをし、心を通わせてきた。お互いに心を知り尽くしている。「俺はもうやだ、たまらん、やめる」何回か電話をかけてきた。白い目の中で耐えつづけていた。

この苦しみを側面から支えてくれたのが「小塚さんを励ます会」の人たち。本当に自分のことのように、あらゆる手を尽くしてくれた。

「有難い。応援してくれるこの人たちがいるうちに頑張らなければ、思いは叶わないぞ。そして、もし、勝ち取ることができたら、その書類で反対する奴らの顔をひっぱたいて、山本機関長の墓に供えよう、仲間たちの無念も晴らしてやろう。」私の返事はいつも決まっていた。

「小塚さんを励ます会」の人たちは、国の社会保険審査会に最後の望みをかけた。

霞ヶ関の厚生省で、この五月二十五日行われた、社会保険審査会には、私も四人の代理人の一人として加わり、発言の場を得た。(安部浩基・弁護士、大石保・代理人代表、間間元・医師) 私は、元乗組員、同僚として、それに申請人の小塚さんが、すでに喋る事ができなく、寝たきりの状態で、

酸素吸入を必要とするようになってしまった。私には小塚さんになり代わり、仲間たちのことも合わせて思いを代弁した。国に対し、ビキニ事件の被曝実態を直接訴えるのはこれが始めて、生の声を国に聞いていただく絶好のチャンスだ。

被曝以来、私たち乗組員が辿った苦悩、発病、半数にも及ぶ仲間の死、それもみな共通していること、「被曝さえしていなければ、このようなことはありえない」と。そして「立場や限界があるのしょうが、良識にしたがって排除の方法を探すのではなく、助ける方法がないかをさがして欲しいのです。」と心をこめて訴えた。

静岡県で二度も却下された。内心は駄目だろうなと思っていた。しかし、願いは通った。本当に良かった。嬉しかった。浜松の仲間先生から電話が掛かってきた。「国にも良心が残っていいね」。同感である。

早速小塚さんのところに行きました。でも皮肉です。手取り合せて心のそこから喜び合うことができません。顔はほころびますが本当に通じたのかも分からないような状態です。残念でならない。

この勝利の判決をばねに、一日も早く回復してくれることを心から願っている。

△9 12記▽ (元第五福竜丸乗組員)

展示館で九・二三の集い多彩に

久保山忌句会、平和を語る会、マグロ塚をつくる会、パネルディスカッション

四十六年目の久保山愛吉さんの命日の九月二十三日、第五福竜丸展示館でいくつかの集いが今年も持たれました。



平和を語る第五福竜丸の集い

十時半「第八回平和を語る第五福竜丸の集い」午前の部が展示館内船首下いっばいにはられた大海原のような青いシートの特設会場ではじまりました。(同実行委主催)。中村博日本子どもを守る会会長の司会のもと、紙芝居「おかあさんのうた」「あかふんせんせい」「とびうおのぼうや」はびょうきです」が渡辺亨子さん、菊池好江さん、右手和子さんのやさしい語り巧みな話術でつぎつぎに演じられ、大海原に浮かぶようなうな座布団に座った子どもたちが目を輝かせ聞き入りました。川島保徳さんの民話「おこりじぞう」の語り、大石又七さんのマグロ塚の話も聞き川崎アコーディオンサークルと子どもたちのたて笛の合奏を共に口づさみつつ観賞しました。午後の部は、集いを中心にして準備した協会評議員堀田てる子さんの民話の語りではじまり、独唱、合唱、うたと口演を演じ、沖繩の歌と三線の演奏などが展示館を訪れた人々、参加者を魅了しました。

正午近く降りはじめた秋雨に急



マグロ塚設置を祝う平和と交流の集い

集会場をこの四月設置されたばかりの「マグロ塚」の前から館内船尾近くに机、椅子、シートをいっばいならべて移動、マグロ塚の設置を祝う平和と交流の集いが開かれました(マグロ塚を作る会主催)。大石さんのよびかけに賛同し運動を支えた人々が四〇名余集い、大石さんを囲んで運動の喜びと苦勞を語り合い、今後の運動のすすめ方などを討議しました。築地市場で仕事する大石さんの友人から極上のマグロのかたまりが届けられ、見事な包丁さばきでお刺身が作られ、全員で供養の心もこめて賞味しました。

また、東京原水協と江東区原水協が共催した「核兵器廃絶・非核の日本と東京を2000年9・23第五福竜丸のつどい」が、第五福竜丸展示館に近い夢の島体育館研修室で十三時三〇分から開かれ、都内各地から八六名が参加しました。

つどいでは「新しい世紀を迎えるにあたって第五福竜丸展示館の歴史的使命を語る」と題されたパネルディスカッションが行なわれました。パネラーの山崎元さん(東京原水協代表理事)は第五福竜丸事件の日本の平和運動にあたる波紋、事件の歴史的背景や原水爆禁止署名運動発祥の地東京の貢献について、深井平八郎さんは、保存運動に携わった経緯を、夢の島での第五福竜丸発見当初の状況や運動を保存された人々のエピソードを交えて、その苦勞を語りました。パネラーに招かれた協会の山村理事は、展示館来館者数のデータと来館者ノートの子供の感想文をもとに「訪れる多くの小・中学生たちと」新しい世紀をもつに語り合える広場としての展示館の役割について話しました。

つどいは、展示館への期待とともに、施設の拡充など東京都への要求を確認。雨の中参加者は展示館前庭の久保山愛吉記念碑に献花を行い、夕刻散会しました。

第五福竜丸元乗組員小塚 博氏の「船員保険再適用申告」に対する 社会保険審査会の「裁決」に当たって

大石 保

三年前、ビキニの被ばく者で第五福竜丸元乗組員の小塚博さんが、静岡県保険指導課宛に「船員保険の再適用」を求めて「申告」を行いました。

小塚さん達は二十三名の第五福竜丸乗組員は、本来アメリカ政府によって補償されるべき人達です。しかしアメリカは、あくまで過ちを認めず、日本政府もまた、アメリカの法的責任を不問としたまま、総額二〇〇万ドルで政治決着をつけたのです。国家同士による驚くべき「人権傷害事件」です。あれから四十六年が経過しました。この間に、久保山さんに続いて十名の乗組員が亡くなりました。その多くが、肝臓病が原因の死亡でした。当時小塚さんは、地元医師からC型肝炎の感染を告げられ、次は俺の番かと不安を抱えながら、隣の榛原総合病院に通院中でした。

一九九七年三月、私達が組織し運動を進めていた「静岡県ビキニ水爆被災事件調査研究会」が主催した「第一回全国交流会」に、証言者として参加した小塚さんが、「俺達はヒバクシャなんだ。治療費くらい何とか補償して貰いたい。」と訴えました。集会に出席していた、医師や弁護士、そして海員組合のOBの方から、「労災の適用」や「船員保険の研究」等の発言が続き、今回の運動の口火となりました。

平成十年九月十七日、「申告書」が県に提出されました。「申告」に対する県の対応は、動揺し、誠実さを欠くものでした。最初に接した県職員は、「たいへん大きな問題なので、真剣に取り組みたい。」との態度でしたが、その後呼び出しがあった時には、「県には当時の資料が見当たらない。県独自の判断が出来ないので、厚生省に問い合わせ中。」と後退し、四ヶ月後「不承認」の決定が送られてきました。その決定書には、小塚さんのそもそもの病気の原因については、ひと言の記述もありませんでした。私達は直ちに県の審査官に「審査」を請求しました。審査官は、放医研への直接調査に入る等の多少の期待を持たせましたが、五月に送られてきた「決定書」は「請求を棄却する。」というものでした。その理由は「請求人のC型肝炎感染は、急性放射能治療による輸血が原因」と推定しながら、「社会通念上治療している。」と言い、請求を「棄却」しています。こうして、静岡県は、小塚さんの請求を二度に渉って拒否したのです。

私達は、七月、静岡県の「決定」の取り消しを求めて「社会保険審査会」に「再審査」を請求しました。厚生省はこれを受理、翌平成十二年五月二十五日、公開での「社会保険審査会」の開催を通知してきました。「社会保険審査会」は、厚生省の中にありますが、委員は内閣総理大臣が任命し、健康保険や船員保険に関わる「再審査」に最終的な裁決を下す、権威ある機関で、今回は通例を越えて質疑は三時間余続きました。そして、ほぼ六十日後七月三十一日付の「裁決書」が、請求代理人大石保宛届けられました。裁決の本文は、「静岡県知事の処分は、これを取り消す。」という明解なもので、小塚さんの県に対する申告は、全面的に認められ、現在治療中の肝臓疾患の治療費は、完治するまで全額船員保険の負担とする。申告日より五カ年間に渡る治療費の返還も決定されました。

私たちは、今回の画期的な成果が「ビキニ被災者」の国による「医療補償」に一点の火を灯すものであり、当面、第五福竜丸生存乗組員への「船員保険療養給付再適用」の道を開くものと考えています。又、今回の「裁決」を契機に「ビキニ水爆被災事件」の全容解明のため、国や県が総力を挙げて調査に当たることを求めるものです。

今回、申告の代理人となっていて、常に小塚さんを支えてくれた四十八人の方々、短期間(約七〇〇日)にも拘らず、県内は勿論、全国から大きなご支援や八九〇〇筆に及ぶ「署名」を寄せて頂いた皆さん。こうした、たくさんの皆さんに「支援する会」の代表として心からの感謝を申し上げます。そして今現在、ベットに寝たまゝ点滴の管に繋がれながら頑張っている小塚博さんの、一日も早い回復を、祈らずにはおれません。(小塚博さんを支援する会代表)

平和祈る天鼓とともに

第二〇回久保山忌句会

沖 正子

遺言碑を守るかのように、鈍色の湾に向かって咲いているのは曼珠沙華だ。その赤く反り返った細い花びらを震わして、どんどんつくつくと天鼓が鳴り響く。

秋空一枚遺言碑
田中 千恵子



久保山愛吉記念碑を前に武田上人の説話を聞く

が生まれたのは一九八一年の第一回久保山忌句会。以後、休むことなく毎年集い続け、詠み続けて二〇年。今年の九月二三日は二〇回記念集会ということで、日本山妙法寺から武田隆雄上人をお招きした。平和の集会などで親しまれている黄色の僧衣で打ち鳴らすあの団扇太鼓と「南無妙法蓮華経」のお題目が愛吉碑に、船に、エンジンにと轟く中、順次リンドウを手向ける。

「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」と刻まれた碑面は苦しみと憂いの歳月がかかったように、うっすらとした苔色に沈んでいた。すみません、いまだに核兵器がなくなりませんと詫びつつ、自分の受け持ちの核廃絶国際署名もなかなか進んでないことに思いが及び、私は愛吉さんに一筆でも伸ばしますからと心で謝っていた。献花のあと、檀家も家庭も持たない宗派で無給という、まだ若

く、涼やかな瞳をした武田上人が、平和祈念行脚について話をされる。

「修行の形態が歩く行なで、平和行進の歩く行為とは合っている。平和行進では毎年、船の周りを鼓いて回り、ここから出発し、数時間歩いては一時間の休みを繰り返して、広島迄行きます」という平和への祈りの尊い行と、反核への情熱に頭が下がった。

行脚僧の
靴に非核がりんどろく
宇治橋 健

うちは太鼓の
風紋沖へいわし雲
小野 かおる

曼珠沙華
非核法衣の色に一本
柄沢 なをこ

墓前での新たな誓いの行事が終わると、俳人はすぐ俳人の目になって、エンジンや福竜丸に皆散っていくが、今年はその築地の原爆マグロが「マグロ塚」としてここに建ったので、マグロを詠んだ句も生まれました。

ガイガー音
忌に新たなりマグロ塚
花房 凡夫

潤む秋空

地球に一つまぐろ塚
山口 石鳴

江東区民センターの句会場には一九八一年から昨年までの久保山忌句会の歴史を刻んだ大ポスターやビデオ「廃船」のイラスト、皆んな若かった頃の白黒写真のパネルなどがびっしり飾られ、いつもと違い、少し厳肅な雰囲気がある。会場正面に掛けられた「原水爆のない未来への航跡を刻んで」2000・9・23の今年のタイトルはとても素敵だ。それは俳句で綴った核廃絶運動のたゆみない航海系統を暗示し、ロマンを秘めた言葉だから。

三人の出席者で開かれた句会での最高句は鈴木節子さんと、第一〇号第五福竜丸特別船員証に選ばれ、最後に賞状と記念のメダルが贈られた。

被爆エンジン
歯車しかと囁む秋天
鈴木 節子
(新俳句人連盟)